【Ａｑｕａ】～アクア～

過去未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【Ａｑｕａ】～アクア～

【Ｎコード】
Ｎ１８４４Ｇ

【作者名】
過去未来

【あらすじ】
とあるファミレスでのお話。忙しい毎日に少しずつ訪れる変化を描いた作品です。今回は今はやりの交換小説の形をとっています。奇数話は過去未来、偶数話はしずくさんに参加していただいて書いています。話の整合性に問題があるかもしれませんがなるべく合わせるようにしましたのでその矛盾具合も楽しんで下さい。

第1話

「はい、オーダー入りました」
「喫煙席待ち４組です」
「３番まだお冷いってません」
「ただいまお伺いします」
「ありがとうございました」
「日替わり終了です」
「ランチタイム終了しました」

お昼のファミレスは戦場である。短い時間に一度にお客様がいらっしゃるのでお店は大変なことになっている。お腹が空いて１秒でも早く食べたいお客様の気持ちと、１組でも多くお客様をさばきたいお店の気持ちが混ざり合ってお店全体から湯気が出ているような感じだ。冴子もその戦場に身を置いている戦士の一人だった。一応店長という肩書きはあるのだが、やっている仕事といえばアルバイトのそれと全く同じであった。

「ふう、やっと一息つけるわ」

冴子は事務所に入り、ドリンクバーのホットコーヒーのブラックを持ってきてタバコに火をつけた。

「店長、アルバイトの面接できた佐々木さんという方がお見えになっていますが、、、」
「あっそう、禁煙席の一番端に座ってもらって。アイスコーヒーを２つ置いておいてちょうだい」

そうだ、今日はアルバイトの面接の日だった。ランチタイムは忙し

いから2時以降に来てもらうようにしたんだっけ。
時計の針は2時10分を指していた。もうちょっと遅く来てくれてもいいのに、、、冴子は自分らしからぬ思いをしてしまったことに一人苦笑いをしてろくに吸っていないタバコを消し、ブレスケアをシュッとひと吹きしてからフロアに出た。

「こんにちは、はじめまして」
「こっこんにちは、よっよろしくお願いします」
「そんなに緊張しなくていいですよ。さぁお掛け下さい」

まだあどけなさの残る男は23、4歳といった感じだろうか、いやまだ学生かもしれない。世間知らずのボウヤといった所かな。
冴子は一人勝手に男の第一印象を決めつけて話し始めた。

「じゃあまず履歴書を見せて下さい」
「はい、、、あっあれっ、ん？ちょっと待って下さい」

男は自分のカバンをゴソゴソし始めた。あーあ、なんか段取り悪いなぁ。メチャメチャ慌てているよ。でもなんかかわいらしいわね、フフッ。
冴子のおもいっきり上から目線など気付く様子もなく男は履歴書を探した。しばらくして男は叫んだ。

「あっありました、ありました。ここに！」
「そんなに叫ばなくても見ればわかりますよ。汗かいているわよ。はいどうぞ」

そう言って冴子はおしぼりを渡して、アイスコーヒーを勧めた。こんなに慌てているようじゃ不採用かな、、、

「落ち着きましたか？では名前と年齢をお願いします」
男はしばらくおしぼりを顔にあてて深呼吸をひとつしてから冴子をじっと見つめた。

「改めまして、佐々木一馬と申します。年齢は２３歳、会社員をしております。今回は深夜のアルバイトを希望しています」
「社会人ですか、、、ウチも社会人を何人か雇ったことはありますが基本的には学生さんがメインなんですよ。社会人の方だとなかなか続かないんですよね。佐々木さんは大丈夫ですか」
「それは社会人、学生というよりもその人個人の問題じゃないんですか。私は目的があって働きたいので軸がブレることはありません。ちなみに発言もブレません」
「そっそうですか、あなたがそこまで言うのなら、、、わかりました。まだ何人か面接がありますので、明日の夕方６時までに採用、不採用を連絡させていただきます。本日はありがとうございました」

一馬が帰った後冴子は事務所でさっきの面接を思い返していた。おしぼりを当てた後のあの変身ぶりは何だったのだろう。仕事が出来るのか出来ないのかよくわからない感じだわ。でもあの変身した後の感じは悪くないわね。久しぶりに使い物になるかしら。あれこれ考えながらタバコに火をつけ、ぬるくなってしまったコーヒーを一気に飲み干した。

次の日になってもお店の忙しさは変わらず戦場となっていた。冴子が一息をついたのは夕方４時になってからだった。そうだ、アルバイトの面接の結果を連絡しないとだわ。冴子は昨日までの履歴書を眺め、一馬ともう一人、そしてキッチンを何名か採用することに決めた。

週末のファミレスは特別な場になる。普段来店しない家族連れが中心になるので1組1組の滞在時間が長くなる。その結果入店をお待ちになるお客様が多くなり何かとトラブルが発生しやすいのだ。冴子は新人バイト君たちのデビュー戦を土日に設定した。土日の方が新人君たちがどの位動けるかを試すには一番よくわかるからだ。その分リスクは大きいのだが、、、

二人が出勤するのは土日共午前１０時半から午後3時半までだった。一番忙しいランチタイム2回戦だ。冴子は出勤してきた二人に渇を入れ始めた。

「えーと、佐々木一馬さんと後藤純也さんですね。今日と明日は1週間の中でも一番忙しい時間帯です。その中でウチの仕事の流れを覚えてもらいます。わからないことは無理してやらなくてもいいです。こちらから指示をだしますので出来るだけテキパキと動いてみて下さい。厳しいかもしれませんがよろしくお願いします」

「店長の悪い癖が始まったよ。いきなりランチタイムじゃ辛くてすぐに辞めちゃうよ。もっと時間をかけて丁寧に教えてあげればいいのに、、、」

周りのバイトの人たちはいつもの店長の対応に半ば慣れっこになっていた。バイト同士で新人君たちが何日で辞めるか賭けが行われていた。1日で辞めると賭ける人しかいなかったので今回の賭けは成立しなかったようだ。

第2話（前書き）

第1話では出で来なかった店の名前。第2話でしずくさんが命名してくれました。アクアです。それがそのままこの小説のタイトルとなっています。それではしずくさんの部分をお楽しみ下さい。

第2話

【Ａｑｕａ】－アクアー

都内、ビジネス街からも住宅街からも離れたひっそりとした場所に、この店はある。
店の名を表すように『水』をコンセプトにした店内は窓というものが存在せず、代わりに窓際と呼ばれる場所には壁一面に大きな水槽が佇んでいる。
水槽の向こう側は黒で覆われており、外から室内が見えなければ中から外を見る事も出来ない。
青い世界に抑えられた白の照明・・・中に入れば、全く別の空間。
その店は、大人から子供まで幅広く人気があった。

その珍しさ故、来店客の年層は固定されない。
昼夜問わず社会人や、家族連れが出入りする。
土日、ランチ時でなくても混んでいるのはこういう理由だった。

この店が出来た当初は社会人、カップルがターゲットだったが、新しく家族も対象にして行こうと今の店長である冴子は敢えて子供向けのメニューを取り入れ、子供視線の場所にちょっとしたインテリアを置くなどして年層の拡大化を図った。

それが見事に的中し、今ではそれが当たり前になっているから社会人と家族連れが一緒の空間にいる事に客は違和感を感じる事もなければ、クレームをつける者もいない。

店内は内装に凝っているからそれ程広くなく、家族が１０組でも入れば満席になってしまうくらいの大きさだった。

暫く固定の従業員でやっていたが昼の人手が足りなくなったのと、今回新たに深夜営業を行うに伴って深夜勤務出来る従業員を同時に募集した、という訳だ。

午前１０時、一馬は更衣室から出てくるとすぐ隣の休憩室に入った。休憩室には一馬の他に一人しかいなく、設置されたテレビの方を向いてしまって背中しか見えない。
ファミレスの休憩室とは言え店長が女だからだろうか、白基調の部屋は綺麗に整理整頓させられていた。所々にフロアで使われているインテリアが飾られている。

アクアの従業員はそんなに多くない。ピークの昼時でさえフロアは冴子を含めて5人程で回している。冴子ともう一人社員がいて、他3人が学生だ。
頻繁に使われる部屋ではない為か、そんなに汚れないのだろう。

「あっ、おはようございます！」
一馬の声に振り返った人物は同じ格好をしている。
黒のベストとパンツ、中には白いシャツを着ていて胸元には深緑のネクタイをしていた。
後ろから見ると髪が短かった為か良く分からなかったものの、大きめの瞳と薄くだがメイクされた顔で性別が女性だと判別できた。
「今日から入る人だっけ？私は松永葵。同い年だから敬語とか要らないから、宜しく」
片手をヒラつかせながらあっさりとした挨拶をして葵は笑った。
髪の色はいじってないのか綺麗な黒で、ワックスを付けている。
「俺は佐々木一馬、宜しく。あれ、制服・・・」
いきなり敬語を口に出す所を抑えて、一馬は短い挨拶を交わした。
それと同時に改めて葵を見ると、すぐに目に付いたのは胸元のネクタイだった。

「ああ、これ。私だけちょっと特別に借りてるんだよ。だってパンツの方が動きやすいし」
一馬の視線に何が言いたいのかを理解した葵は、ネクタイに指先を触れながらそう言った。
アクアの女性用制服は、パンツの代わりにタイトスカート、それに深緑のネクタイの代わりに深紅の紐リボンとなっていた。
そう、葵が身に着けているのは男性用制服だった。
面接をした際、冴子の身に付けていた制服と違うので一馬の中で些細な疑問を感じたのだろう。
「本当はダメなんだけどねー、まぁサエも良いって言ってるし」
店長である冴子の愛称なのだろうか、そう言うと葵はうんうん、と一人で頷いた。
葵は短大卒の後、ずっとこのアクアで働いている。
数少ない社員である葵は、丁度冴子が店長として店にやって来たと同時に店に入ったので冴子とは関係が長い。
最初はきちんと敬語を使っていたのかもしれないが、今は違うのだろう。葵の口調からその様子が伺われた。
「折角の深夜希望なのに、テストとは言え時間潰してまで昼働かせるのはねー・・・私もどうかと思うんだけどさ。まぁ、今日明日頑張って」
「ああ、頑張るよ」
肩を竦めて苦笑混じりに言った葵に、一馬は笑って返した。

一馬の希望している深夜の時間帯、家族連れは全く来ない。
客層が限られるその時間帯は、一日のうちかなり落ち着いた時間帯になるからだ。
一番客の出入りが激しいのは、やはりディナーよりもランチになる。
家族、カップル、社会人・・・全てが訪れるこの時間帯に入れる事によって、どれだけ出来るかが時間を掛けずに見られるという訳だ。

冴子は無駄に時間を掛ける事が嫌いだ。
普通だったら研修の為に一人に何日も何週間も掛ける、という事をしない。
その冴子のやり方に着いて行けないバイト希望者は後を絶たない。
しかし、最初こそ厳しくても慣れてしまえば仕事は細かく教わる事が出来、何よりも口うるさく言う者もいないので仕事しやすい場所となる。
従業員は皆その事を実体験として把握してはいるが、敢えてそれを言う者はいない。
後が楽だと勘違いしていると、仕事が疎かになるからだ。

午前１０時１５分
一馬は葵と話している間に、いつの間にか周りに従業員が控えている事に気付いた。
コックも増やすのだろう、白いエプロンを身に着けた人物も何人か見える。
勿論、一馬と同じ時間から入る後藤という男も制服姿で少し離れた位置に座っていた。

フロアに続く扉の向こうからパンプスの近づく音が聞こえてきた。
部屋にいた従業員がそちらに視線を向けると、扉の開く音と同時に現れたのは店長の冴子だった。黒い長めの髪を纏めてアップにし、少々キツそうに見えるその表情でゆっくりと従業員を見回した。

「おはようございます。今日はランチタイムに新人さんが二人入るので、困ったらフォローし合いましょう。・・・葵、フロアへの誘導は任せたわ。それでは、今日も宜しくお願いします」
「了解ー」
冴子の短めの挨拶に対し、慣れた様子の葵の返事で返したのが１０

時２５分。
先に出た冴子の後を続いて葵が扉を出る。
緊張するそれぞれの思いの中、一馬と後藤は戦場の扉をくぐった。

第3話（前書き）

地獄のランチタイムが始まった。果たして一馬と後藤の試験やいかに、、、

第3話

１１時のオープンまで３０分あるので葵は新人二人にお店の開け方やオープンの段取りを教えていた。二人はメモを取りながら葵の後を金魚のフンのようにくっついていった。キッチンはキッチンで新人君たちに食材の場所や食器洗い機の使い方などを教えていた。

午前１１時アクアオープン。お店の扉を開けると開店を待っていたお客様が２，３組いた。

「いらっしゃいませ。大変お待たせいたしました。さあどうぞ」

葵が愛想良くお客様を中へ誘導する。今日もまたアクアが目覚めた。ランチタイムは相も変わらず混雑していた。後藤は他のファミレスで経験があるのか周りの動きを見ながら見よう見まねで業務をこなしていた。一馬は従業員の動きをじっと見つめてはしきりにメモを取っていた。それを見て葵はすかさずツッコミを入れた。

「メモを取るのもいいけど体もちゃんと動かしなさいよ」

「はっはい、すみません、、、」

一馬は葵の言うことに素直に従った。この子たちは鍛えればモノになるかもだわ。葵は心の中でそう思っていた。

一方冴子は時々フロアを覗いていたがキッチンの新人君たちの動きがあまりにも遅いのでキッチンに渇を入れていた。

「いきなり食事を作れって言ってるわけじゃないんだから先輩の動きを見ながら食器を洗ったり雑用をしっかりやってちょうだい。ほらそこのボウルをかたづけて！」

キッチンのメンバーは冴子の怒鳴り声などお構いなしに黙々と料理を作っている。冴子の怒鳴るのはいつものことなので全く気にしていないようだ。

お店としては特に大きなトラブルもなく無事にランチタイムは終了した。冴子はフロアの二人と葵を休憩室に呼んだ。

「お疲れ様でした。1日目はどうでしたか。結構きつかったんじゃないかしら。辛かったらいつでも辞めてもらっても構わないけど早めに言ってちょうだいね。葵、どうだった二人は」
「うん、思ったよりもよかったよ。愛想もいいし、テキパキ動いていたし。二人さえやる気があれば大丈夫じゃないかな」
「そう、よかったわ。じゃああと1日ランチタイムお願いね。もう上がっていいわよ。お疲れ様でした」
「お疲れ様でした」
「失礼します」
二人は早くその場から立ち去りたいのか、さっさと休憩室を出て行ってしまった。休憩室には冴子と葵だけになった。
「さっきの評価は本音で言ったの？」
「そうよ、二人ともいい動きをしていたわ。ここじゃなくても必要としている所なら即採用になってるんじゃないかしら」
「そう、よかったわ。でも問題はキッチンね。全く使えないわ。今の子ってなんで周りの空気が読めないのかしら」
「今の子って周りと協力して何かをやるってことが苦手なんじゃないかな。あの子だけのせいじゃないだろうけど、そういう時代なのかねぇ」
「あと1日はがまんするけどその後はクビね」
「フロアの二人は大丈夫だと思うよ」
「葵がそういうのなら大丈夫ね。わかったわ、フロアはそのまま継続してもらいましょう。ありがとう。フロアに戻ってもらってもいいわ」
冴子は休憩室で一人タバコに火をつけながら考えていた。フロアの二人はどうだったのだろう。特に一馬の動きは気になっていた。あれだけのことを言っていたのだからそれなりの動きはしているのだろうか。明日はフロアを見る時間も作ろう。

次の日は日曜日だけあって昨日よりお客様の入りが多かった。冴子は昨日フロアを見たいと思っていたが昨日以上の忙しさのためキッチンに掛かりっきりになってしまった。新人君たちが色々ミスをしてしまいその後始末に追われてしまったのだ。昨日以上にイライラしてしまい新人君以外にもキツく当たってしまっていた。
「ふぅ、何とかランチタイムは乗り切ったわね。さて新人君たちに判決を言い渡しますか」
冴子はまずキッチンの新人君たちを呼び出した。
「二日間お疲れ様でした。あなたたちもわかっていると思うけど、こんな動きじゃこのお店ではやっていけないと思うわ。二日分のお給料は払いますから他の仕事を探してちょうだい。厳しい言い方だけどお店のレベルを落とす訳にはいかないのよ。わかってちょうだい。」
新人君たちは覚悟をしていたのかさほどショックを受けている様子はなかった。
「ご迷惑お掛けして申し訳ありませんでした。これからまた修行していつの日かまた働けるように出なおしてきます。ありがとうございました」
「そう言ってもらえるとうれしいわ。二日間ご苦労様でした」
空気が読めないと思っていたけど去り際は見事だわ。冴子は変な所で感心していた。
「ふぅ、なんとか店長の機嫌がもどったみたいだ。前もってヤツらに言っておいてよかったよ」
冴子の判決を陰で聞いていたキッチンの先輩たちはホッと胸をなでおろした。
「でも新人君たちがいなくなるってことはまた俺たちでやっていかないとだろ。結構きついよなぁ、、、」
「そうだよな。ただでさえ人が少ないのに店長の厳しい一言で新しく入ってくる人がほとんどいないしなぁ」
キッチンのメンバーも固定されてしまっているのでかなり疲れがた

まっていたのだ。

「なんですって！あなた誰に向かって口をきいているの。何様のつもり？もう一度言ってごらんなさい！」

キッチンのメンバーが話していると休憩室から冴子の怒鳴り声が聞こえてきた。

「ですからお願いされる前にこちらからお断りします。今の状態でこのお店を続けていったら確実に潰れますよ。あなたはプライドが高いからその理由を認めたくないだろうけどその理由が知りたかったらいつでも連絡下さい」

一馬は顔を拭いたおしぼりをテーブルに置いて冷静に続けた。

「私の言い方が生意気なのは謝ります。でもあなたは頭が切れる人で冷静で物事の判断がしっかりできる人だ。少し時間をかけて考えれば私の言っていることがわかるはずですよ」

「もういいわ。言い訳は聞きたくないわ。あなたの望み通り今日限りで辞めてもらって結構です」

「ありがとうございます。お世話になりました。また近いうちにお会いできることを祈っています」

「祈るのは勝手だけどその祈りは一生届くことはないわ！」

一馬はかすかに笑みを浮かべて休憩室を出て行った。

「後藤くん！あなたはどうなの？」

冴子はとなりで呆然としていた後藤に一馬と同じような口調で質問した。

「えっ、あっ、おっ俺いや自分はその、、、」

「あっ、ごめんなさい。つい同じように訊いてしまったわ。後藤くんは続けてもらえますか。仕事ぶりもよかったのでお店としてはお願いしたいのですが」

「はっ、よっ、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく。深夜営業は少し先になるから当面はディナーの後半からラストまでをお願いします。葵、それでいいわね」

「あっあぁ、それでいいよ」
葵もその一部始終を見ていたので半ば呆然としていた。冴子の叫び声はキッチンにもフロアにも響き渡っていたのだ。
その日のアクアの水はよどんでいた。従業員の動きも心なしか鈍いような感じである。神秘的なイメージがウリのお店もこの日ばかりは都会の汚れた空気に汚染されたような雰囲気がただよっていた。

冴子は珍しく葵を誘って飲みに行った。葵もなんとなくそうなると感じていたのか、冴子の誘いに二つ返事でＯＫした。冴子のイメージからするとおしゃれで薄暗いバーを想像するが、アクアのイメージとかぶるので飲みに行くときには明るい感じの居酒屋などをあえて選ぶようにしていた。今日も例外なくチェーン展開している赤い看板の居酒屋に入っていった。
「私は生、葵は？」
「私も生でいいや」
二人は生ビールが来るやいなやかんぱーいとジョッキを派手にぶつけ中ジョッキを一気に飲み干した。
「ぷはーっ。やっぱりはじめの一杯は一気にいかないと」
「そうだね」
「すみませ～ん。生二つ追加で」
「サエ、酔っ払う前に言っておくけどワリカンだからね。私今月結構厳しいんだ」
「ん？いいよいいよ。今日は私がおごるから。私から誘ったんだからジャンジャン飲んでいいよ！」
「ホント？じゃあ遠慮なくいただきま～す」
二人は付き合いが長いせいかお互いに駆け引きない関係で成り立っていた。普段からお互いに言いたいことを言っているが、それは相手を信頼している証であった。
「あいつどう思う？なんかムカつくんだけど」
「あいつって、あの佐々木一馬のこと？うーんなんかよくわからな

いよね。出来るんだか出来ないんだか。ただ仕事中にしきりにメモを取っていたのが気になったけどね。私の指示をメモるだけならあんなにメモはしないし、、、」
「そう。あと面接の時も今日の最後もそうなんだけどオロオロしている感じだったのがおしぼりを顔で拭いた途端に急に冷静沈着なキャラに変わったの。私が上に立っていたのに立場が急に逆転してしまったみたいで、、、何が何だかよくわからなくなってしまったわ」
「普通のサラリーマンがダブルワークで応募しに来た感じじゃないみたいだね。どうするの？これから。彼に連絡するの？」
「あの場で大見得切ったからすぐには連絡できないわ。私のプライドも許さないし。しばらく考えて頃合をみて何か口実をつけて探ってみるわ」
「わかった。サエ、一人で抱え込まないでいつでもサポートするから遠慮なく言ってね」
「ありがとう。葵のことはいつも頼りにしているわ」
「よしっ、仕事の話はおしまい。明日のことは気にしないでジャンジャン行こう！」
「そうね、ガッツリいきましょう。でも明日のことは考えましょう」
「まぁまぁ堅いこと言わずに店長さん」
「もうやめてよ、二人の時は店長なんて照れくさいわよ。サエでいいわ」
「了解！」
その日は二人で浴びるほどの酒を飲んだ。店のお酒が無くなるのではないかと心配するくらいだった。そして二人はほとんど記憶をなくしたまま夜が更けていった。

第４話（前書き）

第４話はしずくさんが書いたお話です。一馬がいなくなったアクアはどうなってしまうのでしょう、、、

第４話

アルコールの少し残る体に飲み過ぎたか、と今更になって後悔しながら冴子は今日もアクアに出社した。
休憩室に入れば既に着替えをしているスタッフが所々に見える。
自分も着替えようと更衣室に入ろうとしてノブに手を掛けた時、冴子は一瞬動きを止めてもう一度休憩室を一瞥した。
「・・・葵は、まだ来てないの？」
誰に言う訳でもなく、その場にいる数人に問い掛ける。
葵がアクアに来るのは早い。冴子より後に来る事なんて今まで一度たりともなかった。
いつもある存在が今日は無い違和感に気付いたのだ。

「葵さん？・・・そういえばまだ来てないですね、休みの連絡もないです」
キッチン担当の一人も見回しながらそう言った。
冴子と視線が合った後藤は、知らないと言うように慌てて首を横に振った。
バッグの中から携帯を取り出す。そこには着信履歴は無く、いつもの待ち受けだけだった。
冴子は葵の番号をアドレスから呼び出すと掛けようと携帯を操作した。
と、同時にその部屋に電話の呼び出し音が響いた。
その場にいるスタッフは冴子を見る。冴子は携帯をバッグに再びしまうと白い電話へ手を伸ばした。

「おはようございます、アクア・・・・・・、・・・葵？」
相手が葵だったのか。
一応、と決まり文句の挨拶から始めると冴子はやっぱり、と息を着

いた。
「どうしたの？遅刻なんて珍しいわね。・・・、え、・・・何？」
からかうように笑いながら言う冴子の顔は、一瞬にして凍り付いた。
その様子から周辺のスタッフは窺うように冴子を見つめる。
「葵！どういう事！？・・・葵！！・・・っ！」
それ程大きくない部屋に冴子の叫び声が響くと、暫くして冴子は受話器を持った手をゆっくり下に下ろした。
いつまで経っても離そうとしない冴子にしびれを切らしたのか、スタッフの一人は恐る恐るといった感じで「・・・どうしました？」と問い掛けた。
受話器を持つ手は微かに震えている。
まるでこの世の終わりのように青ざめた表情の冴子は、どう見ても異常だった。
一体この数分・・・いや、数秒の間に何があったのか。
問い掛けから大分時間が経った後、冴子は消えそうな声でこう言った。

「葵は・・・・・・、もう来ないわ」

休憩室がざわついた。
さっきまで忘れていたと言うのに、残ったアルコールが回る感覚に陥る。
葵が来ない、という言葉の理由を問うスタッフの声が今の冴子には遠くに感じた。
冴子は、手に持った受話器を元の位置へと置いた。
フラつく足元をしっかり見つめると、顔を上げた。
「葵は、もう来ないと・・・ただそれだけよ。理由は分からない・・・でも、店を開けない訳にいかないわ。さぁ、行きましょう」
冴子の言葉に、反応する者はいなかった。
それは、葵のいない状態で成り立つのかという不安と・・・冴子の

あまりにもさっぱりした態度がそうさせていた。

「・・・店長・・・無理ですよ」

誰が言ったのか、その台詞が小さく部屋に響いた。

「何言ってるの、早く・・・」

イラっとしながらそう言い掛けた所で、冴子は言葉を止めた。

一体どうして今まで気付かなかったのか・・・そこにいるスタッフには、見るも明らかに疲労が見えていた。

唯一入ってきたばかりの後藤だけが違うが、アルバイトを全て辞めさせて少人数でのやりくりを余儀なくされたキッチンのメンバーが特に酷かった。

これが女性だったら、とっくに根を上げていただろう。

開店２０分前。

冴子は時計の音だけ響く部屋にぽつりと言葉を落とした。

「今日は・・・、いえ・・・暫く店は閉店します。皆帰っていいわ・・・」

まさかの発言にスタッフは急には動きはしなかったが、一人が動くと連鎖するように皆着替えて部屋を出て行った。

最後の一人が姿を消すまで、冴子はずっとその場に立っていた。

きっと外では未だＣｌｏｓｅの立て看板の前で人が疑問に思いながら待っているのかもしれない。

しかし、その前に出て理由を説明する気力は今の冴子には無いに等しかった。

冴子は私服の侭、足をフロアへと移動させた。

広がる青の世界・・・そこは変わらず神秘的なのに、ガランとした空間は寂しげだった。

「・・・う・・・っぅ・・・」

冴子はゆっくり一つの椅子に座ると、テーブルへと腕を置いて顔を

伏せて声を押し殺して泣いた。
頬を伝わる涙は、その日ずっと水槽を流れる水と共に止む事はなかった。

『都合により、暫く休業致します。
お客様にはご迷惑をお掛けしますがどうぞ宜しくお願い致します。
Ａｑｕａ』

次の日、冴子は泣き腫らした赤い瞳のままアクアに来ていた。
勿論誰がいる訳ではない。休憩室は変わらず静まり返っているしフロアは熱帯魚が今日も優雅に泳ぎ回っている。
冴子が来て一番始めにしたのは、Ｃｌｏｓｅの看板と共に添える謝罪文の作成だった。
一文字一文字パソコンで打つ度に胸が締め付けられる思いだったが開店時間前にはやらなくてはいけない作業だった。
でないと、今日もお客様が来てしまう。

謝罪文を添え終わると、何もする事がなくなった冴子は掃除を始めた。
掃除などフロアやキッチンの担当に任せっきりなので冴子にとっては店長になって以来、初めての作業だった。
一人で隅々まで掃除をしていくに連れて色々な所が見えてきた。
子供視線にある玩具が壊れていたり、汚れが酷かったり・・・ガラスの置物が壊れているのを見た時にはよく怪我がなかったと安堵の息さえ零した。
ガラスの置物を撤去して代わりにぬいぐるみを置いた。
キッチンに至っては男性に任せているからか、見えない位置の汚れは酷く落とすのにかなりの時間を要した。
全ての掃除が終わるのに1日だけでは収まらず5日も費やしてしま

った。
冴子の体力も底を尽きていたが全てを掃除し終わると達成感からか久々に心地良い疲れと感じた。
見えない部分の改善も完璧で、衛生上も問題ない。
ドリンクバーでコーヒーを入れると一息着く為に禁煙席の一番端に座った。
どうしてその位置に座ったのか分からなかったが、あの一件から何故か全く煙草を吸わなくなったので座る場所はどこでも良かった。

コーヒーを口にすると、ふとその場所がほんの一週間ちょっと前に面接を行った場所だという事に気付いた。
目の前では慌てながら書類を捜す佐々木一馬の姿がちらつく。
冴子はその時感じていた可愛らしい、とかボウヤ、とかそんな事は一切捨ててじっとその残像を見た。
ふとフロアを見れば決戦だった土日の映像が流れて消える。
勿論、葵も、一馬も・・・キッチンを見れば他のメンバーが忙しなく動いていた。

『今の状態でこのお店を続けていったら確実に潰れますよ』
記憶の中の一馬が別れの挨拶の前に言った言葉を繰り返した。
一馬と、自分。
対面しているのを今の冴子は冷静になって見つめていた。
あの時のような怒りが、今は全く起こらない。
何故ならあの時言われた事が現実になろうとしているからだ。
受け入れたくない現状だったが、事実から目を背けてはいけない。

冴子は履歴書の控えをテーブルへと持ってきた。
『その理由が知りたかったらいつでも連絡下さい』
一馬はこうなる事を予想していた。
その理由を、どうしても冴子は知りたかった。

プライドが許さないとかそんな事を言っている場合ではない。
一馬の履歴書を開く。
あの時はじっくり見てもいなかったが冴子はもう一度じっくり見直した。
特に変わった所は見当たらない。普通に学校を卒業して会社員になったという経歴だ。
視線は電話番号に移った。
冴子はポケットに入っている携帯を取り出してその番号に電話をした。

『はい、もしもし』
一馬にとっては知らない番号だからか、どこか様子を伺うような口調が聞こえた。
冴子は何かを言おうとするが言葉がうまく出て来なく、暫く黙った侭だった。
『・・・・・・もしもし？』
怪訝に思ったのだろう。電話の向こうでは疑問符で声を掛けてくる。
冴子は持っていた携帯を握る力を少し強めると口を開いた。
『水瀬、ですが』
水瀬（みなせ）というのは冴子の苗字だ。
一体苗字だけで伝わるのか分からなかったが冴子にとって今はこれが精一杯だった。
『店長、じゃないですか』
不審な電話だと思っていたからか、一馬の口調は柔らかいものになった。
それが伝わると自然に冴子の肩の力も抜ける。
少しの沈黙の後、言葉を続けたのは一馬の方だった。
しかし、それは冴子にとって衝撃の一言になる。
『店の事でしょうか？それとも・・・葵さんの事、でしょうか？』

第5話（最終話）（前書き）

最終話は過去未来が書きました。右に左にふらついた内容でしたが最終話でアクアはどうなってしまうのかじっくりご覧下さい。感想、批評お待ちしております。

第5話（最終話）

『あおい・・・葵はそっそこにいるの？』
『ここにはいません。葵さんの事が心配ですか？』
『べっ別に心配じゃないわ。私は事務処理で忙しいの。余計な電話をかけてこないでちょうだい』
『・・・わかりました。でも電話をかけてきたのは店長ですよ』
『そっそうだったかしら。とにかく忙しいから切るわよ』

冴子は電話を切ってからしばらくぼーっとその場で立ちつくしていた。そしてわれに返ってから後悔した。何で一馬になんか電話をしてしまったのだろう。自分から負けを認めてしまっていいのだろうか。私にはまだ考える時間が必要だわ。働いていたみんなはもういない。葵もいない・・・私一人でなんとかしなければいけないわ。せっかく立ち上げたアクアをつぶすわけにはいかないわ。

冴子はいつ再オープンしてもおかしくないくらいに十分に手入れが行き届いた状態までここ一週間で磨き上げていた。あとは私の心も磨き上げないと。冴子は最後の点検をゆっくり行って店を後にした。

翌日　～　葵と一馬はアクアの前に立っていた。
『都合により、暫く休業致します
お客様にはご迷惑をお掛けしますがどうぞ宜しくお願い致します。
Ａｑｕａ』
「サエ、どこに行っちゃったんだろう・・・」
葵はまた涙目になってしまい、その場に立っていられない状態になっていた。
「あんなに声の力のない店長は初めてだったなぁ。大丈夫かなぁ・・・」

「ちょっときつすぎる作戦だったんじゃないかな」
「うーん、ここまで追い込むつもりはなかったんだけど、予想以上の結果になってしまったね・・・」
「サエ、戻ってくるよね」
「もちろん。そうじゃないとここまでやった意味がないからね」
「・・・うん。私もサエが帰ってくるのを信じるわ」
二人はお互いの肩を寄せ合ってアクアの前を離れて行った。

一ヵ月後　〜　アクアにて

店内には一ヵ月前まで一緒に働いていたメンバーが揃っていた。葵も一馬もその他キッチンのメンバーも一緒だった。
店は開いていたが『本日貸切』の札が表に掲げてあるため一般のお客様は入っては来ない。
皆仕事で来たわけではないのでラフな格好で思い思いの場所に座っていた。

「いらっしゃいませ。本日はアクアにお越しいただきましてありがとうございます。お時間の許します限りごゆっくりおくつろぎ下さいませ」

とてもやわらかい愛情たっぷりの声が店内に響き渡る。その声が冴子の声であるとわかるには少し時間がかかった。それだから冴子の声とわかった時元アクアのメンバー達は驚きをかくすことができなかった。
奥の扉から冴子はゆっくりと出てきた。その姿は一ヵ月前のそれとは全く違っていた。ランチタイムに追われていた頃の鋭さは消えていてそこに存在しているのかいないのかわからないくらいに透き通っている感じだった。
「サエ！元気にしてたの？大丈夫なの？」

葵は半分泣いていたのでなんとか声を絞り出して冴子に話しかけた。
「私は大丈夫よ。さぁ、食事の準備ができました。席に着いて待っていて下さいね」
そう言うと冴子は次々と食事を運んできた。冴子がここまでの料理の腕があるとは誰も知らなかったので皆びっくりしながら食べていた。
その食事達はめずらしいものではなかったが1品1品の味がしっかりしていた。どれも愛情がたっぷりこめられていて満足のいくものであった。
普段作り慣れているキッチンのメンバーも皆声も出さずに黙々と食べていた。
葵も冴子との付き合いが長いのにこんな特技があるとは知らなかった。ただ驚くばかりだった。
「サエにこんな才能があるなんて知らなかったよ。いつの間にこんなに上手に作れるようになったの？」
「うん、まぁ、少しづつ・・・ね。それよりまだたくさんあるからみんなジャンジャン食べてね」
「店長、ありがとうございます。では遠慮せずにいただきま～す」
「もうあなたたちの店長じゃないわよ」
そういうと冴子は静かに扉を開けて奥へ行ってしまった。一同はおいしい食事を食べながら近況報告やらくだらない世間話をしていた。そこにはとても穏やかな時間が流れていた。

どれくらい時間がたっただろう。ランチタイムに入店した一同だったが外はすっかり暗くなっていた。
デザートまでたいらげてしまったので皆まったりとしてしまった。
葵はさっきまでみんなと一緒にいた冴子の姿が見えないのが気になっていた。
「サエ、サエ、どこにいるの？」
葵はまるでお母さんからはぐれた子供のようにつぶやいた。おもむ

ろに立ち上がるとバックヤードに入っていった。奥に行くと休憩室がある。たぶんそこにいるに違いない。葵はテーブルでうずくまっている冴子を見つけて声を掛けた。
「お疲れ様。大変だったでしょう。後片付けは手伝うわよ」
しかし冴子はうずくまったまま返事をしなかった。
「サエ、寝ちゃったの？ねえサエってば」
葵は冴子を起こそうとして何度かゆすったがゆすっても抵抗せずにゆすられたままに左右に激しくゆれる様をみてはっとしてゆすっていた手を離した。
「サ・・・エ・・・？・・・いや～っ！」

元アクアのメンバー達は主のいなくなったアクアに残されて言葉を失っていた。あの鬼店長が死んでしまうなんて、信じられるはずもなかった。最後の表情、愛情のこもった料理たち、透き通るような冴子の存在、まさにアクアのイメージそのものだった。最後の最後で冴子はアクアのイメージを身をもって示してくれたのかもしれない。
元メンバーたちは冴子の残してくれたこのお店を隅から隅までながめていた。きれいに掃除の行き届いた店内。暗い雰囲気の店内ではあるが所々にぬくもりを感じさせる置物が配置されていた。常連さんから初めて来るお客様にもゆっくりくつろいでいただけるように居心地のいい空間を作り上げていた。
冴子は最後まで抜かりはなかった。アクアで働いていた従業員全員の次の再就職先を決めていた。それはどこも一流のお店ばかりだった。冴子が1軒1軒まわって交渉したのだろう。その人脈の広さと行動力にはただただ感心するばかりだった。
ただ葵と一馬の再就職先だけは決まっていなかった。
しかし二人は覚悟を決めていた。冴子の残してくれたこのアクアをしっかり引き継いで行けるのは私たちしかいない。冴子もそれを望

んでいるから二人の再就職を決めなかったんだろう。

深海まで落ちていったアクアが再び日の光を浴びるまで少しづつ少しづつゆっくりと上昇を始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1844g/

【Ａｑｕａ】～アクア～

2010年10月8日22時12分発行